

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】桑島 穂

【所属】(助成決定時)大阪市立大学大学院 文学研究科

【研究題目】

1930-40年代の英領ゴールド・コーストにおける植民地教育政策および植民地史叙述に関する研究

【研究の目的】

イギリス帝国の教育史研究において、1920-50年は、植民地だけでなくイギリス本国においても植民地教育への関心が高まりをみせた、特異な時期として理解されている。アフリカ植民地では、地元社会にチーフを擁立しチーフを利用した間接統治体制が実施された。それと同時に、植民地社会の「伝統」(社会秩序や制度)を保存管理することが植民地の運営上も重視され、政策としてイギリス人による人類学の研究や歴史調査が発展した。本研究では、1930-40年代のイギリス領ゴールド・コースト植民地(現ガーナ)においても実施された歴史教育／叙述を対象とする。そして、歴史教育／叙述が持つ役割を考察する。歴史を叙述し学校で教えるという一連の過程は、非常に政治的な行為である。それゆえ本研究は、我々が看過しがちな歴史教育／叙述の持つ政治性・社会性を再検討することにもなる。

【研究の内容・方法】

本研究では、帝国と植民地の政治・社会関係との関連から分析することで、歴史教育／叙述を複合的に把握することを目指した。研究を行うにあたって、植民地政府教育省の年次報告書、本国植民地省諮問委員会の報告書(ロンドン・国立公文書館所蔵)、当時のゴールド・コーストで教育事業に携わった人物の証言記録、覚え書き、などの資料群(オックスフォード大学図書館所蔵)、そして植民地の歴史を叙述した文献、を利用した。

第一に、本国そして植民地政府において、教育政策の発案者の間では、植民地教育の基本方針が共有されていた。それは、本国の教育カリキュラムの踏襲を排し、カリキュラムを植民地現地の伝統・心性に適應させ変化させることであった。現地の歴史・伝承・民族誌を収集記述し教えることはすなわち、カリキュラムの適應を如実に表現しえた。一方、間接統治体制もまた、伝統社会の象徴と見做されたチーフに地方行政を委任している点で、現地社会の状況に適應させたシステムであった。間接統治体制の下、自身の担当した地域の正当性をアピールするため、そして慣習やチーフの系譜を社会紐帯とするため、赴任したヨーロッパ人行政官はチーフと共に積極的に伝承や民族誌を収集した。

第二に、当該時期にゴールド・コーストの歴史教育／叙述において主導的立場にあった W.E.F. Ward のカリキュラムや教育方針に着目した。彼の考案したカリキュラムでは、①ゴールド・コーストの歴史の優先的な教授(偏見に依らない中立な立場での歴史叙述)、②イギリス帝国とゴールド・コーストの歴史的な関係を考えさせる教育、が強調された。具体的には、イギリスの歴史は「議会制度」と「法による統治」の創造と伝播の歴史として表現され、その歴史の中にゴールド・コーストの歴史は関連づけられた。彼は、ヨーロッパの侵略とそれに対抗する非ヨーロッパという構図で世界史を理解している学生に、再考を促そうとした。Ward の意図は、このような歴史教育を通じて、脱植民地化のプロセスにおいて将来起こりえる植民地とイギリスとの対立・緊張や暴力的な変化を抑制することにあったと考えられる。

【結論・考察】

1930-40年代のイギリス領ゴールド・コースト植民地において、歴史教育／叙述は非常に政治的な問題であった。本国・植民地政府においてより効率的に統治を実行するため各植民地に適應した政策が求められる中で、教育カリキュラムは変化し、歴史教育／叙述が本格的に開始された。各地域の歴史は、間接統治体制の下で、行政単位を決定するだけでなく、共同体の紐帯を示す指標でもあった。また、先駆的にゴールド・コーストの歴史教育に携わった W.E.F. Ward の証言や著作から伺えるのは、アフリカ史の生産、そしてゴールド・コースト植民地内の学生向けにイ

ギリス史を書き換えることで、イギリス帝国と植民地の政治関係をより肯定的なものとして理解させようという意図であった。このように、Wardに代表されるヨーロッパ人教育者や彼に教育されたアフリカ人学生の中で、植民地の歴史教育／叙述は現代的な問題、国際関係を孕んだ教科であった。今後は、以上の考察を生かしつつ、歴史教育／叙述(教科書)が当時の学生に如何なる影響を及ぼしたのか、実証的に研究する必要があるだろう。

